

【原 著】

全学教職課程における「教職実践演習への取組」(2)
—試行の成果と課題及び本格実施の実際—

檜田 健志 高旗 浩志 三島 知剛 江木 英二 曾田 佳代子
後藤 大輔 佐藤 大介 山根 文男 加賀 勝

Practical Seminar for the Teaching Profession on the Teacher Training Program at Okayama University (2)

Tsuyoshi KASHIDA Hiroshi TAKAHATA Tomotaka MISHIMA Eiji EGI Kayoko SODA
Daisuke GOTO Daisuke SATO Fumio YAMANE Masaru KAGA

2014

岡山大学教師教育開発センター紀要 第4号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.4, March 2014

原 著

全学教職課程における「教職実践演習への取組」(2)

－試行の成果と課題及び本格実施の実際－

檜田 健志^{※1} 高旗 浩志^{※1} 三島 知剛^{※1} 江木 英二^{※1} 曾田 佳代子^{※1}
後藤 大輔^{※1} 佐藤 大介^{※1} 山根 文男^{※1} 加賀 勝^{※1※2}

岡山大学では、平成25年度後期より本格実施する教職実践演習に向けて、独自で通年開講する教育学部を除く7課程認定学部と教師教育開発センター（以降、センター）が協同して準備を行っている。平成24年度後期に教育学部以外の教職希望学生を対象に15講からなる教職実践演習（以降、全学教職実践演習）の試行を実施した。試行は参加学生へのアンケート調査や授業担当者の反省会で得られた意見より、概ね期待された効果が得られた。一方、試行に参加した学生が教育実習後と比較し伸びているのか、必修科目になれば教職を目指さない学生が混じるため試行ほど成果が期待されないのではないか、等の課題が指摘された。試行の反省を基に、平成25年度前期には受講生向けに「全学教職実践演習ガイドブック」を、40名近くの指導者向けに「全学教職実践演習ハンドブック」を作成した。本稿では試行の成果と課題及び本格実施の実際について報告する。

キーワード：全学教職実践演習、ガイドブック、自己課題

※1 岡山大学教師教育開発センター

※2 岡山大学大学院教育学研究科

I. はじめに

平成18年の中央教育審議会答申ならびに平成20年課程認定委員会によると、教職実践演習は、教職課程を通しての学びや教職課程外の活動を通して学生が身につけた資質・能力が、教員として最小限必要な資質・能力として有機的に統合されたかについて、課程認定大学が自らのカリキュラムポリシーやディプロマポリシーに照らし最終的に確認する、通常4年次後期に実施される必修科目である。岡山大学では教職課程履修者を対象に、平成25年度より教職実践演習を二つの形態で実施する。一つは教育学部の学生が履修する4年次通年開講である教職実践インターンシップと連動した形態をとる教育学部の教職実践演習、もう一つは教育学部以外の各課程認定学部（文学部・法学部・経済学部・理学部・工学部・環境理工学部・農学部。以降、各学部）及びマッチングプログラムコースに所属する教職課程を履修する学生（以降、全学の学生）を対象とした4年次後期開講の教職実践演習である。

教育学部以外の学生を対象とした教職実践演習の取組は自主講座として試行した鹿児島大（田宮・下野.2008）、教育学部と教育学部以外の学生の両方を

対象とする愛媛大学（山崎・釜田・池野・山本・吉村・井上.2013）の報告が見られる。本学では教育学部以外の学生を対象とした、全15講のうち2講分を抜粋して実施した教職実践演習のプレ試行の取組と、各学部から選出された教科専門科目担当教員（以降、教科教員）の、この科目に対する不安感等の意識について檜田・高旗・江木・曾田・三島・後藤・加賀（2013）が報告している。

本稿では檜田他（2013）で述べた成果と課題を基に、平成24年度後期に実施した全15講からなる全学教職実践演習の試行、及び試行後に全学教職実践演習打ち合わせ会のメンバーを中心に確認した成果と課題を基に平成25年度後期に本格実施した全学教職実践演習の取組の実際について報告する。教育学部以外の教職希望学生を対象とした教職実践演習を全学的に実施した総合大学の報告は現段階で数少なく、本学の取組をまとめて報告することは希少であり、価値のあることと考えている。

II. 試行とその成果及び課題

1 全学教職実践演習の試行(平成24年度後期実施)

(1) 目的

教育実習を終えた学生のほとんどが、4年次前期に経験する教育実習中に自分自身が捉えた課題（以降、自己課題）について、本人の自助努力により補われていたり、未解決のままであったりしながら、卒業時に教員免許を取得している現状がある。そこで、教師教育開発センターの一部門である教師教育開発部門（Figure1 参照）は、受講生各自が教育実習でとらえた自己課題の克服やその一助となるような、本学教職課程のディプロマポリシーに見合うような教員免許取得者養成のために、7点の特徴を施した平成24年度 全学教職履修者対象「教職実践演習」試行授業計画（案）（以降、試行授業計画）を作成した（Table1）。この試行授業計画作成にあたっては、教育学部で実施している中学校教育実習基礎研究の取組の一部を参考にしている（高旗・樫田・赤崎.2013）

この試行授業計画についての特徴を簡単にまとめると、1点目に、授業内容に応じてグループワーク・模擬授業・ロールプレイング・プレゼンテーション等の様々な演習形式を用いていること。2点目に、総合大学の良さを生かし、授業内容に応じて、各学部の学生が混ざった大小様々な人数からなる同教科（取得希望する免許が同じ教科）と異教科（取得希望す

る免許が異なる教科）のクラスを設定していること。3点目に、全15コマ全ての授業を、教師教育開発センター教員が受け持つ教職専門科目担当教員（以降、教職教員）と各学部から選出された教科教員のチームティーチング形式で実施することにより、通常指導を受ける機会のない他学部の多くの教員から指導を受ける機会が得られるようになること。4点目に、演習効果をあげるために2コマ続きの構成にしていること。5点目に、受講者全員が教科に関する内容と教職に関する内容の両方を学べること。6点目に、本学教職課程が定める教職実践力を構成する4つの力「学習指導力」「生徒指導力」「コーディネート力」「マネジメント力」について、どの講においても複合的に発揮しなければならない授業内容にしていること。7点目に、原則年内に終了させることにより4年次後期に本格化する卒業研究と両立しやすくしていること、があげられる。

また、授業内容の時間構成をみると教科内容：教職内容＝2:1にしている裏付けとして、この科目を受講する学生の多くが教科専門性の高い高等学校での教育実習を経験する学生が多いと予想されること¹⁾や教育実習事後アンケートの結果より教科指導につい

Table1 平成24年度 全学教職履修者対象「教職実践演習」試行授業計画

講	日程	授業内容	授業担当者	参観	教育実践力を構成する4つの力との関連
第1講 第2講	7月 (水) ④⑤	オリエンテーション 【教職実践演習の目的・意義・授業概要の説明及び課題提示】 教職実践演習の目的・意義等を共有し、全体の構成・展開・評価方法等の概要を説明する。「教職実践ポートフォリオ」に基づき、母校実習で培った自己評価と自己課題を設定し、グループ内で学びの共有を図る。すなわちポートフォリオに基づいて、教員として必要な資質能力の自己評価と相互評価を行うとともに、自己教育課題の設定を行う。	江木・曾田 樫田・三島 後藤(教職)		マネジメント力 コーディネート力
第3講 第4講	2日 (火) ①②	「学習指導力」に係る省察Ⅰ 【学力及び学習者理解の省察と生徒観の深化】 授業設計及び授業実践の基礎となる学力観と学習者理解について多角的に省察し、深化させる。学習指導要領に示される学力観はもとより、「学力」のとりえ方や学習者の実態に応じた授業構想の重要性について理解を深める。	A(文)・B(理) 江木・曾田・高旗 樫田・三島(教職)		学習指導力 コーディネート力
第5講 第6講	10月 23日 (火) ①②	「学習指導力」に係る省察Ⅱ 【授業構想力・展開力・評価力の検証に基づいた授業設計】 母校実習で作成した学習指導案をもとに、特に授業構想力・展開力・評価力の3つの観点から再検討を加え、グループ内で学びの共有を図る。次時の模擬授業演習に係る学習指導案を再設計する。その際、教師の一方的な説明を中心とするのではなく、課題解決型の学習指導案となることを重視する。	C(文)・D(理) 江木・曾田・高旗 樫田・三島(教職)		学習指導力 コーディネート力
第7講 第8講	6日 (火) ①②	模擬授業演習Ⅰ 【模擬授業と省察1】 10名程度の小グループを単位として模擬授業演習を行い、グループ内で分析・省察し、具体的な改善点を提示し合う。授業者としてのパフォーマンスや作成した学習指導案の内容だけでなく、生徒役、あるいは授業観望者としての力量も深化させる。	E(文)・F(理) 江木・曾田・高旗 樫田・三島(教職)		学習指導力 生徒指導力
第9講 第10講	11月 13日 (火) ①②	模擬授業演習Ⅱ 【模擬授業と省察2】 模擬授業演習と同内容で行う。その際、授業における生徒指導的および学習経営的な要素についても十分に検討した学習指導案を構築するとともに、「発問」「板書」「展開・評価」等の教職パフォーマンスに係る観点からグループ内での学びの共有に取り組む。	G(法)・H(環) 江木・曾田・高旗 樫田・三島(教職)	M(法) N(理) O(理)	学習指導力 生徒指導力
第11講 第12講	4日 (火) ①②	現代的教育課題に係る省察Ⅰ 【現代社会と学校教育1】 学校における生徒指導上の問題を、単に生徒の個性の問題と捉えるだけでなく、社会の構造的な要因と合わせて生じていることを理解する。また、特別支援教育やキャリア教育といった現代的教育トピックを踏まえ、学校と家庭・地域社会との連携の実践をケーススタディによって学ぶ。	I(文)・J(工) 江木・曾田・高旗 樫田・三島(教職)	P(理)	生徒指導力 コーディネート力
第13講 第14講	12月 11日 (火) ①②	現代的教育課題に係る省察Ⅱ 【現代社会と学校教育2】 学校組織が多様な校務分掌から成り立っていることを再確認し、合わせ主幹教諭等の新しい職がつけられた背景を理解する。また、同僚性の観点から、職員集団の中で自らのあるべき教師像をプレゼンし、共有し合う。さらに校務関連情報・一貫校教育の現状を具体的な事例に基づいて調査するとともに、こうした取組が求められる社会的背景と、連携・一貫教育を推進することの教育的意義を認識する。	K(経)・L(農) 江木・曾田・高旗 樫田・三島(教職)	Q(理)	コーディネート力 マネジメント力
第15講	18日 (火) ③	まとめ ポートフォリオに基づいた最終的な自己課題の確認と自己評価	江木・曾田・高旗 樫田・三島(教職)	R(理)	

注1：第1講は教育実習事後指導と兼ねる。

注2：いずれの日でも、グループワーク、ワークショップ、プレゼンテーション等の手法を基盤とする。

注3：第5講～第10講では、母校実習で自ら作成した学習指導案の総合的な見直しと、これに基づいた模擬授業に取り組む。

注4：第15講終了後2限に、同講義室にて教職実践演習試行の反省・検討会（仮）を持つ。

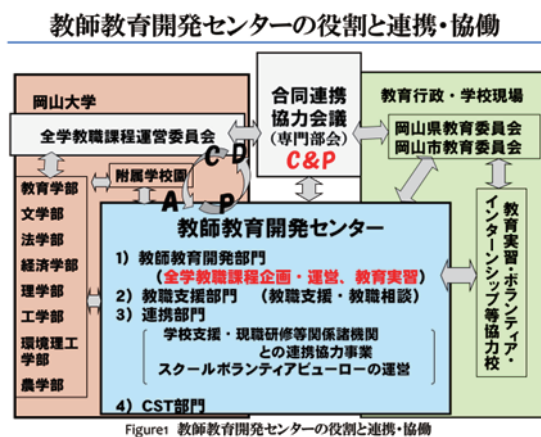
ての自己課題をあげる学生が多く見られていること、等による（樫田他.2013）。参考として、本学教育学部の教職実践演習にあてる時間の割合は教科内容：教職内容の比がほぼ1:1である。入学して以来、教育学部学生と全学の学生では教職コア・カリキュラムを含め、積み重ねてきたことが異なるため、教職実践演習の授業計画そのものが異なることは妥当と判断される。

前述した1点目～7点目の工夫が、実際に学ぶ学生にとって効果のある科目であるかどうかを検証する目的で、平成24年度後期に全8回・全15コマの全学教職履修者対象「教職実践演習」試行（以降、試行）を実施した。試行では、その他にも次のようなねらいを検証することにした。

- ・これまでの段階では判明していない潜在的な課題の確認。
- ・教職教員と授業を組むことによる教科教員のこの科目に対する不安感の軽減。

（２）試行にむけての準備

試行にむけての取組については、教師教育開発センターの教師教育開発部門と連携部門の教員を中心に定期的に全学教職実践演習教職担当打ち合わせ会（以降、教職担当者打ち合わせ会）を開き原案を作成した。続いて、各学部選出の委員から構成される教職課程運営委員会に試行授業計画を含めた原案を諮り、協議を行った。（Figure1）



原案作成の主な内容としては、受講する学生にとって有益な演習であるかどうか、この科目についての認識があまりないと思われる各学部選出の教科教員にこの科目が理解され、教職教員と教科教員のそれぞれの良さが発揮できる授業スタイルを構築できるか、等に重点を置いた。

まず準備として、試行授業計画を5つのまとまりとしてとらえた。すなわち、全体を「オリエンテーシ

ン」・「学習指導力に係る省察」・「模擬授業演習」・「現代的教育課題に係る省察」「まとめ」からなる5つのまとまりに構成した。

1つ目のまとまりとして、第1回（第1-2講）の「オリエンテーション」は、本学が作成した『教職実践ポートフォリオ』を用いて、参加学生に教育実習時の自己課題を確認させ、今後の自己課題の克服に向けてのイメージをふくらませることに重きを置いた。

2つ目のまとまりとして、第2・3回（第3-6講）の「学習指導力に係る省察」は、学習指導要領解説編を精読の上、教育実習時で作成した学習指導案を単元全体から異学年や異校種での既習事項や後に学ぶ未習事項との「系統性」、及び同教科の他の領域・分野あるいは他教科の学習内容や生徒の日常生活との「関連性」の視点を踏まえてリライトを求め、グループワークで練り上げる形態をとった。

3つ目のまとまりとして、第4・5回（第7-10講）の「模擬授業演習」は、第2・3回でリライトした学習指導案による授業を異教科・異学部の学生が混じる少人数教室で実施し、授業後は生徒役の学生が評価票を基にピアレビューを行うことにより、授業検討を行う形態をとった。さらに4人グループを形成し、授業者・進行係・ビデオ係・補助係の役割分担をもたせ、グループでの自主性・協調性を高めるとともに匿名性を減退させることをねらった。

4つ目のまとまりとして、第6・7回（第11-14講）の「現代的教育課題に係る省察」は、2つの事柄を取り扱った。第6回は岡山県が抱える教育課題（いじめ・不登校・暴力行為・学力低位）に着目し、新聞記事を資料として様々な教育課題の顕在的要因及び潜在的要因についてグループでの検討を実施した。第7回は特別支援教育のうち発達障害児の指導に焦点をあて、個別指導の視点にとどまらず、集団指導や教職員や保護者・関係機関との連携の重要性に気づかせる教材を取り上げた。

5つ目のまとまりとして、第8回（第15講）の「まとめ」では、教職実践ポートフォリオを用いての学びの振り返りと自己課題の確認でまとめる形をとった。

ところで、前節7点の特徴や今節5つのまとまりからなる授業内容については、教職担当者打ち合わせ会や教職課程運営委員会の協議の中で、先にあげた効果を疑問視する意見が見られた。例として次にあげる。

- ・「学習指導力に係る省察」で扱う学習指導要領解説を基に展開する中で、教科教員の考えが学

Table2 全学教職実践演習試行参加者数の推移

回	2	3	4	5	6	7	8
実施月日	10月2日	10月23日	11月6日	11月13日	12月4日	12月11日	12月18日
授業内容	学習指導力	学習指導力	模擬授業	模擬授業	現代的課題	現代的課題	まとめ
参加人数	27	19	20	18	17	11	9

習指導要領解説と相反する指導を行った場合、参加学生が混乱するのではないかと。

- ・「現代的教育課題に係る省察」に各学部の教科教員が参加しても的を射た指導講評ができるのか。
- ・授業形態として文系と理系を混ぜて効果が期待されるのか。
- ・教職をしっかりと理解していない教科教員は授業の中で教職教員や学生にどのようにコミットすればよいのか。
- ・教職に関心のない教員が参加した場合は「町内会の輪番程度」の授業参加になるおそれがあるのではないかと。

これらの意見の多くは、教科教員のこの授業に対する未体験から生じる不安感があげられていた。(樫田他.2013)

そこで、各学部の教員にこの授業に対する理解を深めてもらうため、試行の全15コマを公開とした。その他の主な準備として、試行への参加学生については教育実習時の自己課題を確認させる必要性から、第1回の「オリエンテーション」を教育実習の事後指導と重ねる形で実施し、試行を前面に打ち出すのではなく、

教職に関してより専門性を高める「演習型講義」の実施として、参加を呼びかけた。合わせて、「演習型講義」の実施について教職を目指す教育学部以外の課程認定学部の3年生と教育学研究科以外の大学院生にも有益であると考え、学内メールであるGメールを用いて募集したところ、全員で29名が応募した。試行に参加した学生の内訳は4年生21名、大学院生1名、3年生7名である。また試行に参加する教科教員については、第2回(第3・4講)が始まる前の9月中旬に教科・教職の教員合わせて16名による「教職実践演習授業担当者事前打ち合わせ会」を開催し、試行の目的と授業内容・運営面での共通理解を図った。

(3) 試行の実施

授業のスタイルはどの回も教職教員が授業を進行し教科教員が補佐を行い、授業の終盤に教科教員を中心に指導講評を行う形態をとった。参加学生には毎回の授業ごとに授業の終盤に振りかえりと自己評価を求めた。具体的には、第1回～第8回の自らの学びの程度を確認できるようにA3用紙1枚にまとめたワークシートを作成し、参加学生の自己課題克服の一助となるように配慮した。また、教科教員と参

Table3 試行(演習型講義)の主なよかった点(成果)と改善点(課題)
(第8回参加学生9名の自由記述アンケートより)

大項目	中項目	小項目(主な意見)
よかった点 (成果)	授業内容	学習指導力に係る省察
		・知らないことの多さを見て見ぬふりをしてきたことに気づいた。
		・教科書において学習指導要領がどのように具現化されているか確認できた。
		・他人に言ったことがブーメランのように帰ってくる。
	現代的教育課題に係る省察	・新聞記事からキーワードを取り出し、カテゴライズすることで様々な要因を再確認できた。
		・障害があるなしに関わらず、今回学んだことは生徒とのコミュニケーションを築く上で参考になった。
改善点 (課題)	授業形態	模擬授業演習
		・模擬授業とフィードバックの時間がじっくりと取られていた。
	全体	・自分の授業をビデオに撮ってもらい再確認できた。
		・多くの先生方から非常にためになるアドバイスをいただいたことが特によい。
	授業形態	模擬授業演習
	授業内容	全体
	授業形態	全体

観教員には毎回授業後にこの科目についての感想と修正点についての自由記述アンケートを実施し、成果と課題の把握に努めた。教職教員は「教職担当打ち合わせ会」を試行期間中に定期的に開催し、成果と課題の検証を行った。なお、Table2はこの試行に参加した学生数の推移である。

Table2からわかるように、第7回の「現代的教育課題に係る省察」以降、参加人数が大きく減った。特に3年生は第5回の「模擬授業演習」から第6回「現代的教育課題に係る省察」にかけて4名→1名のみの参加となり、教育実習を経験していない3年生にとって教科指導への関心の高さと生徒指導等の教職課題についての関心の低さが予想された。第8回の「まとめ」では参加学生9名にこの科目のよかった点と来年度に向けての改善点について自由記述アンケートを実施した。第8回の授業後には、授業担当者による「全学教職実践演習の試行」反省・検討会を開き、全8回を実施しての試行の改善点と来年度の受講生の評価方法について協議した。

（４）成果と課題

全8回の試行を実施して学生や教科教員からの自由記述アンケートより得られた主な成果と課題についてまとめたものがTable3（参加学生）、Table4（教科教員及び参観教員）である。

Table3より、参加学生の意見から概ね肯定的な意見が寄せられ、自己課題の確認やその克服の一助に寄

与することをねらった効果があげられていた。特に「よかった点（成果）」であげられた「授業形態」の「全体」での学生の意見は、「現代的教育課題に係る省察」を含め教科教員の指導講評が専門とは違う領域についても、参加学生へ新たな視点を与えたり視野を広げたりする等の教育効果が期待される意見であった。

改善点（課題）については、これまでの協議でも意見が出ており予想されたことであるが、来年度に向けて検討しなければならないことを参加学生からも改めて指摘されることとなった。特に「全体」についての改善点（課題）は、進路状況調査²⁾によると、各学部の教員免許を取得する学生のうち教員採用試験を受験する学生は4割に満たない状況であり、教育実習後の学生の教職の授業に関するモチベーションが気になる場所であった。次にTable4は、教職教員と一緒に試行の授業を行った教科教員及び授業の参観教員の主な意見である。

Table4より、各学部教員の意見は学生と比べるとやはり鋭く、様々な視点からの成果と課題の指摘があった。学生の状況の課題は、そのまま授業内容の精度の高さが求められており、授業内容についての課題は再検討も含め、精査すべき方向性が指摘され、試行計画の段階では気づかなかった潜在的な課題であり、貴重なものであった。また、「現代的教育課題に係る省察」であげられた課題は全学の学生の弱点を指摘している。すなわち、自分達で考えを深める

Table4 試行（演習型講義）の主な成果と課題 （試行教科教員及び試行の参観教員14名の自由記述アンケートより）			
大項目	中項目	小項目（主な意見）	
成果	学生の状況	模擬授業演習	・模擬授業はいずれもよく準備をされていて、生徒への働きかけができていた。
		全体	・学生が熱心で雰囲気がよかった。
	授業形態	学習指導力に係る省察	・グループワークで議論して、各自の考え方や理解が深まっていた。 ・異教科グループワークがあるのがよいと思う。
		模擬授業演習	・この授業の要はピアレビューだと思う。
		全体	・このようなスタイルの授業は新鮮であり、非常によい試みである。
課題	学生の状況	学習指導力に係る省察	・学習指導要領解説を精読できていない学生が多く見られた。
		模擬授業演習	・学習目標に到達しない授業が多かった。
		現代的教育課題に係る省察	・正しい回答を求めたがる傾向が感じられた。
	授業内容	学習指導力に係る省察	・系統性と関連性について、整理・説明し意識させる必要があった。
		現代的教育課題に係る省察	・目的が「この手法の理解」なのか「このテーマに対する対策を知ること」なのか、はっきりさせて行うべき。

前に答えを知りたがったり、正しい1つの答えを求めたりする傾向が全学教職履修者の2～3年次の授業科目を担当する教職教員から課題として指摘されており、この課題についての対策も高じる必要があった。また、このアンケート調査を基に教職担当打ち合わせ会の中で、「教育実習後と比較し、学生は伸びたのだろうか」等の、この科目に対して成果の根幹に関わる意見もあった。

しかし、授業形態は好意的に評価され、その後の教職課程運営委員会でもこの科目に対する不安の意見がほとんど出なかったため、試行の目的である「これまでの段階では判明していない潜在的な課題の確認、教職教員と授業を組むことによる教科教員のこの科目に対する不安感の軽減等を図る」ことが概ね達成されたと判断できた。

このように試行を通して顕在化した成果と課題に対し、丁寧に検討及び修正を加えることが平成25年度後期に本格実施する全学教職実践演習へのテーマとなった。

2 本格実施に向けての準備（試行後～平成25年度前期）

（1）全学教職実践演習シラバスの見直し

試行後、最初に着手したことがシラバスの見直しであった。平成25年度後期からスタートするこの科目についての情報は、教師教育開発センターが平成24年度から本学教職課程を学んでいる学生に向けて、定期的に電子文書として発行する「教師教育開発センターニュースレター」へ掲載することにより、この科目の目的や内容について情報宣伝を行ってきた。ただ、学生にどれほどこの科目について認知されているかは不透明であり、学生にとって公的な拠り所はシラバスである。この科目のシラバスは既に作成されていたが、授業計画作成やプレ試行及び試行を通して見直す必要があった。シラバス見直しの中で、特に注意を要したことが成績評価であった。各学部の学生にとって4年次後期のこの科目の単位を取得することは教員免許取得に大きく近づくことになる。また一方で、文部科学省からは課程認定学部をもつ大学には「教員免許の質保証」が求められている。教職教員5名、教科教員30名程度の参加が予想される

Table5 全学教職実践演習授業課題への対応		
授業内容	試行で顕在化した課題	対応策（例）
学習指導力に係る省察	・学習指導要領解説が精読できていない。	・学習指導要領解説に基づくとともに、系統性と関連性を踏まえた単元構想を求め、教育実習時に作成した学習指導案のリライトを宿題とする。その際、学習指導案づくりの「10の視点」を与え、学習指導要領解説、教科書、補助教材等を適切に踏まえさせる。
	・系統性と関連性について整理・説明し意識させる必要があった。	
模擬授業演習	・全員に模擬授業をさせないと学生の中で授業に臨む軽重が起こる。	・予習として、授業者の学習指導案を評価するピアレビュー評価票を課し、模擬授業を実施しない学生が主体的に参加できるようにする。また、受講者全員にリライトした学習指導案に記載された学習活動について詳細な理由付けを求め、学習目標と学習活動、評価の整合性を図った評価課題レポートを提出させる。
	・学習目標に到達しない授業が多かった。	
現代的教育課題に係る省察	・正しい回答を求めたがる傾向が感じられた。	・学生からの希望テーマである「保護者対応」を取り上げ、課題の背景をとらえ、ロールプレイングを通して、教師の姿勢を学ばせる。
	・目的が「この手法の理解」なのか「このテーマに対する対策を知ること」なのかははっきりさせて行うべき。	
全体	・来年度は全員が必修の授業で、今回のように意欲的に取り組むことができるだろうか。	・ガイダンスで高校教育について仕組みや実情について、教育委員会指導主事の講演を聴く機会を取り入れ、意欲付けを図る。
		・社会人としての自覚を育むべく欠席・遅刻について課題を課し、厳格に対応する。

中で、適切で妥当な成績評価方法を検討した。

検討の結果、レポートと授業と宿題の資料を綴じたポートフォリオ形式による提出物、教科教員によるパフォーマンス評価を基にした教職実践演習評価票による評価を実施することにした。

（２）授業内容・授業形態等の再検討

試行により顕在化した課題について、全学教職実践演習教職担当打ち合わせ会で継続的に検討し、改善を図った。まず授業内容の３つのまとまり（「学習指導力に係る省察」「模擬授業演習」「現代的教育課題に係る省察」）の課題については、協議の結果、Table5に示す方法で対応することにした。Table5の対応策（例）のように、試行により顕在化した課題の一つ一つについて、丁寧に協議していった。Table5以外では、教師教育開発センターホームページのうち、全学教職実践演習受講者がログインできる受講者専用ウェブサイト上に模擬授業者の学習指導案（細案）及び授業資料を掲載したり模擬授業者の授業ビデオの閲覧を可能にしたりするなど、予習やふり返りに使用できるようにした。課題のうち、模擬授業演習についてはできるだけ多くの学生に模擬授業を経験させるために一人あたり20分授業で実施することも検討したが、フルタイムに近い形での授業を実施しないと教育実習のふり返りや課題克服に至らないと判断し、模擬授業のクラスサイズを小さくし、実施教室数を増やすことにより、受講生の1/4以上が模擬授業を経験できる形態を計画した。

また試行の際取り扱った、現代的教育課題のうち、「岡山県教育課題」の原因探求は有要であったが、

学生にとっては総花的に映り、絞りきれなかった反省もあったため見直し、試行を受講した学生が複数名希望していた「保護者対応」を扱うことにした。さらに、学生の関心が授業や生徒指導などの局所的な関心に止まっている恐れがあったため、全体的な視野への関心を高めるため高等学校の教育課程について岡山県教育委員会と連携して、岡山県教育庁高校教育課参事を第1回のオリエンテーションに非常勤講師として招き、高校教育の実際についての講演を依頼した。なお、岡山県教育委員会がH25年8月に県内の教員用に作成した「体罰防止ハンドブック」を講義資料として授業内容に応じて活用することに定めた。

授業の運営面については、卒業研究や就職活動の活発化が予想される4年次後期に、ほぼ全学に近い7学部に渡る2コマ連続の授業の実施は本学でも初めての試みであり、やむを得ない欠席が予想された。原則全出席を求めているが、物理的に2コマ分の補講の実施は難しく授業に関わるレポート提出で対応することにした。早朝Ⅰ・Ⅱ限の授業のため遅刻者が増加することはグループの演習効果を妨げるため、遅刻者には教職教員が推薦する課題図書の中から1冊を選びレポート提出を求めることにし、厳格に対応することにした。

（３）指導者用ハンドブック及び学生用ガイドブックの作成

平成25年4月の教職課程運営委員会で各学部選出の教科教員が明らかになったが、教科教員33名と教職教員5名の総勢38名で行うスケールの大きな授業となった。授業者のうち、1回のみ授業に参加する

table6 授業内容別クラスサイズ・組み合わせとねらい

授業内容	クラスサイズ	組み合わせ	主なねらい
オリエンテーション	大	異教科異学部	これまでの授業とは異なるメンバーと新たな目的の下、新鮮な気持ちで意欲を高める
学習指導力に係る省察	小	同教科・同学部及び同教科・異学部	教科会議をイメージし、同教科教師の視点から、指摘し合う
模擬授業演習	小	異教科異学部	通常学級に近いさまざまな生徒の視点から、授業に無理な展開がないか等指摘し合う
現代的教育課題に係る省察	中	異教科異学部	教員学年会議をイメージし、具体的な教育課題に対し、解決策を練り合う
まとめ	大	同教科・同学部	この科目のまとめと1年次からの教職課程の学びをふり返る

教科教員がほとんどを占め、一人一人の教科教員と教職教員が事前に綿密な授業の打ち合わせ時間を持つことは困難であるため、『全学教職実践演習指導者用ハンドブック』を作成し、共通理解を図ることにした。この指導者用ハンドブック作成にあたっては本学教育学部学校教育教員養成課程用「教職実践演習」ハンドブックをベースに、他大学の教職実践演習刊行物を参考にしながら、全学教職実践演習教職担当打ち合わせ会で検討を重ねた。授業開始直前の9月末には授業担当者を集め、『全学教職実践演習指導者用ハンドブック』をテ

キストとして「全学教職実践演習授業担当者打ち合わせ会」を開き、共通理解を図った。

また、平行して学生用の冊子作成も検討した。Table6 は学生用の冊子作成に関わる、授業内容別授業形態とねらいを概要としてまとめたものである。受講生は授業内容によって、大（約 100 名の大規模教室、固定机）・中（約 40 名の中規模演習室、移動机）・小（約 20 名の小規模演習室、移動机）のクラスに移動し、違うメンバーと協同して演習を行い、課題解決に向けて取り組む。そして Table6 にあげたねらいで同教科・異教科、同学部・異学部の組み合わせを定めた。受講生は授業内容により、教室・一緒に学ぶメンバー・指導者が変わり求められる内容も異なるため、受講生が教室を把握することができずに混乱することを防ぎ主体的に授業に参加できるように、『全学教職実践演習学生用ガイドブック』を作成した。第 1 回のオリエンテーションの場で『全学教職実践演習学生用ガイドブック』を活用し、目的と授業内容の理解を図り、1 年次から積み上げてきた本学全学教職コア・カリキュラムの集大成であることを認識させることにより、試行であげられた課題の 1 つであった受講生の学習意欲の向上をねらった。

Ⅲ. 全学教職実践演習（平成 25 年度後期）の実際

前章までに試行後確認した効果と課題をふまえて作成した日程表が Table7 である。本格実施した全学教職実践演習を履修した学生は各学部と科目等履修生を含め、Table7 で予想した人数と比べやや少ない 94 名であった。試行での反省をふまえ、第 2 回～第 5 回は少人数グルー

プでの実施と、宿題にじっくり取り組むことができるように、隔週に分けて実施した。受講生には試行の際、自らの学びを確認する目的で作成した A3 用紙 1 枚にまとめたワークシートをさらに改良した「自己評価シートⅠ」（第 1 回～第 7 回）と、第 8 回と 1 年次～4 年次の教職課程の学びをふり返る「自己評価シートⅡ」を作成し、記述させた。また、第 1 回に全員が集まった後は、最終回の第 8 回まで全員が集まらないこともあり、第 2 回以降の資料配付は極力教師教育開発センターホームページの受講者専用ウェブサイトを用いて印刷させることもあった。さらに、次時に向けて指示の徹底を図るために、本学の教職情報提供サービス「岡大教職ナビ」を使用した（佐藤・山根・高

Table7 平成25年度教職実践演習（全学教職課程履修者対象）全日程表									
回	月 日	講	授業内容	免許種	履修者	教室	※受講人数	教科担当教員名	教職担当教員名
					該当学部	(教育学部)	(予定)		
1	10/1(火)	1, 2	オリエンテーション	全	全	本館 401	115	A(経), B(農)	高旗,樫田,三島,江木,曾田,山根,佐藤
2	10/8(火)	3,4	学習指導力に係る省察Ⅰ	国・社・商	文・法・経	本館 202/203	22	C(文)	江木英二
	理(中学校)			理・工・MP	講義棟 5205	16	D(理)	樫田健志	
	理(高・化学)			理・工・環・農	講義棟 5207	21	E(工)	三島知剛	
	英			文	本館 202/203	14	F(文)	曾田佳代子	
	理(高・物理, 生物)・農業			理・工・農	講義棟 5205	18	G(工)	江木英二	
	10/15(火)		数学・情報	理・環	講義棟 5207	24	H(理)	高旗浩志	
3	10/22(火)	5,6	学習指導力に係る省察Ⅱ	国・社・商	文・法・経	本館 202/203	22	I(文)	高旗浩志
	理(中学校)			理・工・MP	講義棟 5205	16	J(理)	樫田健志	
	理(高・化学)			理・工・環・農	講義棟 5207	21	K(工)	三島知剛	
	英			文	本館 202/203	14	L(文)	曾田佳代子	
	理(高・物理, 生物)・農業			理・工・農	講義棟 5205	18	M(工)	樫田健志	
	10/29(火)		数学・情報	理・環	講義棟 5207	24	N(理)	三島知剛	
4	11/12(火)	7,8	模擬授業演習Ⅰ	国・社・商	理(中)・理(高・化学)	本館 202/203	59	O(文)	曾田佳代子
	講義棟 5205			(文 22, 理 37)		P(理)	樫田健志		
	講義棟 5207					Q(工)	三島知剛		
	11/19(火)			英・理(高・物理, 生物)	文・理・工	本館 202/203	56	R(文)	高旗浩志
				農業・数学・情報	環・農	講義棟 5205	(文 14, 理 42)	S(理)	三島知剛
			講義棟 5207		T(工)	樫田健志			
5	11/26(火)	9,10	模擬授業演習Ⅱ	国・社・商	理(中)・理(高・化学)	本館 202/203	59	U(文)	江木英二
	講義棟 5205			(文 22, 理 37)		V(理)	樫田健志		
	講義棟 5207					W(環)	三島知剛		
	12/3(火)			英・理(高・物理, 生物)	文・理・工	本館 202/203	56	X(文)	曾田佳代子
				農業・数学・情報	環・農	講義棟 5205	(文 14, 理 42)	V(理)	高旗浩志
			講義棟 5207		Y(環)	樫田健志			
6	12/10(火)	11,12	現代的教育課題に係る省察Ⅰ	国・理(中学校)・数学	全	本館 401	48(文10,理38)	Z(文)	高旗浩志
				社・商・理(高・化学)		本館 404	33(文12,理21)	a(理)	樫田健志
				英・理(高・物理, 生物)・情報・農業		講義棟 5403	34(文14,理20)	b(環)	三島知剛
7	12/17(火)	13,14	現代的教育課題に係る省察Ⅱ	国・理(中学校)・数学	全	本館 401	48(文10,理38)	c(文)	曾田佳代子
				社・商・理(高・化学)		本館 404	33(文12,理21)	d(理)	江木英二
				英・理(高・物理, 生物)・情報・農業		講義棟 5403	34(文14,理20)	e(環)	三島知剛
8	1/7(火)	15	まとめ	全	全	本館 401	115	f(法), g(農)	高旗,樫田,三島,江木,曾田
※履修者数は予定。平成24年度後期～平成25年度前期「教育実習Ⅱ」履修者のうち,「教育実習」予定者の状況より 教員数…文 (10)・法 (1)・経 (1)・理 (9)・工 (6)・環 (4)・農 (2)・教師教育開発センター (5) 計38名									

Table8 教職実践演習アンケート項目（受講生用）から一部抜粋

・この授業は教育実習後の自己課題の克服に有益でしたか。
・この授業を通して教育実習後の時点と比較し、教職への理解がどの程度深まったと思いますか。
・次の授業内容のうち、充実していたのはどれですか。
・この授業の原則隔週2コマ連続で、ほぼ四半期で終わる期間はどうか。
・この授業は卒業研究や就職活動と両立できましたか。
・この授業では次時までの課題を求めることがありましたがどうでしたか。
・この授業は教職担当の教師教育開発センター教員と教科担当の各学部選出教員が合同で授業を実施しましたが、どうでしたか。
・この授業は授業内容によってグループのメンバーを変えながら実施しましたが、どうでしたか。
・模擬授業では、次のどの役割を担当しましたか。

塚・加賀.2013)。こうして全8回の授業運営に関して、受講生も教員も初めての試みであったため、学生の出欠の把握や教員同士の次時の授業への引き継ぎ等、多少とまどう場面も生じたが、大きな混乱もなく授業を実施することができた。

IV. 来年度に向けて

この授業を終えたばかりの現段階において、前章で述べた授業運営のみでなく、授業内容を含め、教職教員はある程度手応えを感じている。また、授業と一緒に実施した教科教員による教職実践演習評価票にこの授業への所見を求めており、その詳細な分析は今後時間をかけ検討していく必要があるものの、概ね高評価のようである。第8回の授業で受講生に今回実施した教職実践演習について、アンケート調査を実施した。Table8はそのアンケート項目の一部である。上記のアンケート結果並びに前章の自己評価シートⅠ・Ⅱの結果把握と分析については、今後実施することになる。今回の本格実施を試行時と同様に、結果を丁寧に分析しその対応を次年度の授業計画に反映させていくことは、本学の教職を目指す学生にとってよりよい授業科目を構築するための見直しとなり、合わせて授業を通して各学部とのよりよい連携のあり方を模索することにつながる。ひいては、総合大学の良さを生かした教員養成につながっていくことが目指すべき方向性と考えられる。

注

1) H25年度全学教職実践演習受講生のうち70人/96人。約73% この傾向はH23年度教師教育開発センターが実施した教育実習事後アンケート調査を開始して以降続いている。

2) 本学の教師教育開発センターでは、全学教職課程を終えた履修者を対象に、教員採用試験の受験の有無や卒業後の進路状況を把握するためのアンケート調査を実施している。

引用・参考文献

中央教育審議会（2006）今後の教員免許の在り方について（答 申）

樫田健志・高旗浩志・江木英二・曾田加代子・加賀勝（2012）. 全学教職課程における「教職実践演習に向けての取組」－教科専門科目担当教員の意識に着目して－ 平成24年度日本教育大学協会研究集会 発表概要集 34－35

樫田健志・高旗浩志・江木英二・曾田加代子・三島知剛・後藤大輔・加賀勝（2013）. 全学教職課程における「教職実践演習に向けての取組」－教科専門科目担当教員の意識に着目して－ 岡山大学教師教育開発センター紀要 3, 171－178

樫田健志・高旗浩志・三島知剛・後藤大輔・江木英二・曾田加代子・山根文男・加賀勝（2013）. 全学教職課程における「教職実践演習に向けての取組」（2）－試行を通して顕在化した成果と課題－ 平成25年度日本教育大学協会研究集会 発表概要集 44－45

課程認定委員会（2008）教職実践演習にあたっての留意事項

佐藤大介・山根文男・高塚成信・加賀勝（2013）. 教職情報提供サービス「岡大教職ナビ」における成果と課題 岡山大学教師教育開発センター紀要 3, 143－151

高旗浩志・後藤大輔・三島知剛・樫田健志・江木英二・曾田加代子・高橋香代・加賀勝（2013）. 全学教職課程の質保証に関する実証的研究（1）－平成22年度入学生の経年変化を中心に－ 岡山大学教師教育開発センター紀要 3, 80－89

高旗浩志・樫田健志・赤崎哲也（2013）. 中学校教育実習基礎研究改訂の取組－学部と附属の連携による試み－ 日本教育実践学会 第16回研究大会

研究大会論文集 24 - 25

田宮弘宣・下野浩二（2008）. 教育学部以外の学生を対象とした「教職実践演習（仮称）」の試行－卒業後のアンケートから見えること－ 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 18 209 - 19

山崎哲司・釜田史・池野修・山本久雄・吉村直道・井

上洋一（2013）. “学びの軌跡の集大成”としての「教職実践演習」－学部を超えて統一した「教職実践演習」の実施－ 平成 25 年度日本教育大学協会研究集会 発表概要集 40 - 41

Practical Seminar for the Teaching Profession on the Teacher Training Program at Okayama University (2)

Tsuyoshi KASHIDA^{*1}, Hiroshi TAKAHATA^{*1}, Tomotaka MISHIMA^{*1}, Eiji EGI^{*1}, Kayoko SODA^{*1}, Daisuke GOTO^{*1}, Daisuke SATO^{*1}, Fumio YAMANE^{*1}, Masaru KAGA^{*1*2}

^{*1} Center for Teacher Education and Development, Okayama University

^{*2} Graduate School of Education, Okayama University

Keywords : all-University practical seminar for teacher profession, the guidebook for students in all-University practical seminar for teacher profession, assignments students have after practice teaching
